

この正月ひさびさにツタヤへ行くとベルイマン（インゲマー・ベルイマン、1918年〜2007年、スウェーデン、映画監督）の作品が3本、〈良品発掘〉というコーナーに並んでいた。ベルイマンは若いころから見ていて（昭和40年代は高知でもベルイマンの映画が映画館に普通にかかっていた）、NHKBS放送でも何度もベルイマンの特集があったりして、何度も見ていて、いまさら、とおもったが、たぶんベルイマンの映画を見るのはこれが最後の機会かもしれないとおもって借りてきた。もう五、六回は見たというのに。

感想としてはそう特別なものはなかったが、『野いちご』を中心にくり言を書いてみる。『野いちご』は老いと死を扱っているのだが、この作品は1957年製作だからベルイマン39歳のときの作品だ。そんな若さで老いや死をテーマにする度胸はたいしたものだ。ほくなんか39歳といえば、チャラチャラと生きていたのに。

78歳のイーサクは、ひと付き合いのおもな中身はそこにない。いだけかの噂をし、悪口を言うことでしかない、それが嫌で友をつくらなかったし、人との付き合いを断って「孤独」に暮らしてきたが、歳がいくと「孤独」を感じる、と告白するところから映画ははじまる。しかし、自称エゴイストのイーサクは医学の道では優秀だったらしく、自分の仕事に対しては社会に貢献し、満足しているという自負も同時に語られる。その成果として母校の大学から名誉博士号を授与されることになり、いま住んでいる街（たぶんストックホルムだろう）から授賞式のために母校のある街まで車で出かける一日の話として語られる物語だ。ベルイマンにしたらヴィム・ヴェンダース張りのめずら

もつとみつともない悪夢に襲われるかもしれない。そんなことがないよう願ってはいるが、人生なにが起こるか分からない。なにに逆襲されるかわからない。（いや、反対に、悪夢にすら逆襲されることなどない老いはさみしいかもしれない）

ほくもひととの付き合いは苦手で、とくに歳がいつてからはひと付き合いからは逃げてばかりいる。若いころはアマチュア劇団などを運営していて、濃厚な人間関係のなかで暮らすことに苦痛を感じなかった、というか、見知らぬ他者とおもわぬ関わり方することに愉楽を感じていた。

市街地で事務所を構えて仕事をしてきた30代から40代はバブル期からその崩壊の時期でもあって、世間は常にふわふわとしていて、ひとの往き来が激しかった時代で、糸井重里の「おいしい生活」などという消費を促すキャッチコピーが氾濫し、バブル経済がやって来、あつというまに破裂するその渦中で、ほくもふわふわと生きていた。事務所には毎日たくさんひとがやって来て、夜は夜で毎日飲み歩いた。

そういう生活にだんだん疲れはじめたのは、歳をとってきて気力や体力がなくなってきたからだろうか、それとも、他者との関わりかたが下手になってきたからだろうか、それともイーサクのように利己主義が台頭してきたからだろうか、そこらへんはよくわからないが、ひとと話した後はどっと疲れがくるようになった。とくに世間話をした後の疲労感といつたらない。自分はいまつまらない話をしている、この場を壊さないように適当に相づちを打っている、声は飛び交っているが中身はなにもない、そんな気分ですら世間話を繰り返すようになっていた。だから

しいロード・ムービーだ。

その当日の朝、イーサクはみずからの「死」を予感させる夢を見ることで、その道中、夢と現実が交叉してイーサクの老いと死を観客が味わう、という組み立てがされている。死を予感する夢とは、針のない時計とか、荷馬車に積まれた自分の死体とか、けっこうシニールな映像で表現されていて、ベルイマンがシニールアリズムにこころひかれていたことがわかる。

イーサクはその性格にくわえて学究一筋に生きていたがため、青年期、恋人だったサーラは弟に奪われ、妻には愛人をつくられ（夢のなかで妻カーリンは愛人にこう言うのだ、「夫がこのことを知っても、哀れなカーリン、と言うだけだ」）、なおかつ自分の専門分野の医学の道でも、夢のなかでおこなわれた「試験」に合格することができなくて、あげくのはてには「あなたの罪は「孤独」だ」と告げられたり、再度登場した昔の恋人サーラには鏡を見せられ、若いままのサーラと年老いた自分の姿の差を認識させられたりと、老いの身には過酷な夢（というよりも幻想に近いのだが。ふと、内田百閒の小説など思い出しながら見ていた）がつきつきと襲ってくるのだが、どれもこれも自分の人生だとおもえば、それも良しではないか、とおもいながら見ていた。

ひととは誰しも皆、人生いつもこんな踏んだり蹴ったりな道筋を歩んでいるのではないか。それにイーサクは利己主義を信条としてきた。だったらその自分と心中することしかかれの選ぶ道はないのに、とほくはおもうのだが、いやいや、ほくもあと12年経ってイーサクの歳になったら、そんな能天気なことなどいえないほどの孤独と死への恐怖に襲われて、イーサクよりもときどき、世間話なのに、言わないでもいいこと、余計なことを言ってしまったりして響きを買いはじめた。ほくの悪い癖である。「ひと言多い大家」である。ほんとうは、詩の話や映画の話や美術の話だけで暮らしていけばいいのだが、そんな幸運は月に一度もやってこない。だからひととの接触を避けてひたすら本を読むようになった。

市街地から、いま住んでいる朝倉に移ったのは50歳のときだった。それまで手仕事だった印刷関係の仕事が、パソコンを中心にしたデジタル仕様に転換しはじめた時期でもあった。それを機に、世間話だけの付き合いはやめようとおもった。だから仕事仲間、パソコンやデザイン関係の古くからの仕事仲間だが、かれらとも付き合いをやめてしまった。仕事仲間と酒を呑んだりすることは情報交換の場でもあり、仕事をスムーズにこなしていくには必要なことでもあったが、なんとなく、もういいや、とおもってしまった。だから情報も適確に入らなくなり困ることもあったが、その不便さより、自分の利己主義的な気分を優先した。年賀状もやめた。隠居生活のようになってしまった。

女房には、いざ来れる最後の身の振り方を予習しておきなさい、と言われつづけたが、あつというまに老後になった。なんの予習もすることなく老後になった。老後になったらひと付き合いを増やして無駄な会話を潤滑油としてボケを防ぐ、という風潮に背をむけている格好だ。しかし、興に乗らない会話をし疲れてしまうのは、この歳にはこたえる。イーサクのようにひと付き合いの中身はだれかの噂話と悪口だけだとはおもわれないし、声を出すことで身体が活性化を帯びてくるし、他者と

の会話は脳の刺激にもなるらしいが、どうでもいいことの話が多すぎる。だからついつい、そんな話してなにおもしろいのかとおもってしまう。だからついつい、言う必要のないひと言が口から出てしまう。場が悪くなる。場を読まない発言ほどタチの悪いものはない。

だからそういうことがあった次の日などは一日中声をだすこともなく本を読むことにしている。あるいはなにか書き物をすることにしている。そういうばくからみれば、利己主義のイーサクが自分の意思でひととの付き合いをやめたといっているにもかかわらず、孤独だ」と言っているのは、ちよつとクレームをつけたくなったが、もしかしたらばくもイーサクの年齢になつたら、孤独だ」と泣き言を言ってしまうかもしれないので、いまから戦々恐々としている。孤独を孤独だと認めて生きていける老人になりたいのに。そうなるのだろうか。

それにしてもなんと無策なイーサクだろう、とついおもってもしまふ。青春期、サーラをほんとうにはしいとおもっていたら、弟から奪い返すなんらかの手段を講じるだろうし（たとえ功をろうさなかつたとしても）、カーリンの浮気現場を見たときもそれなりのリアクションをしておけば、などとおもおうが、たぶん、イーサクはそういうことから一歩も二歩も身を引いて生きてきたんだろう。

それは、母校への道中、まだ生きているイーサクの母親（100歳近いだろうに）を訪ねたときに、威圧的で横暴な母親のことを「死さえ逃げていく存在」だとつぶやく場面があるが、母の圧倒的な存在がイーサクの性格を決定づけたのだろうし、イー

イーサクには息子がひとりいて、いまは医者をしているのだが、妻が妊娠したことを拒否している。それはイーサクとカーリンの家庭が愛情のあつたものでないことを知っているし、「ぼくは不倫の子かもしれない」とおもっている以上、妻との幸せな家庭など幻想でしかない」と妊娠した妻を拒否している。「いつでも死ぬるように身軽でいたいから子どもはいらぬ」とまて言っている。そのことを息子の妻にうちあけられたイーサクは息子も自分と同じ「孤独」の道を歩いているのかとどうちめされるシーンがある。ベルイマンに子どもがいたかどうか知らないが、もしいたら、ベルイマンは子どもにたいしてどう接していたのだろうか。もしかしたらこの映画のなかの息子はかれの子どもがモデルかもしれない。

もし息子がいると仮定したら、その息子にしてみれば祖父は厳格な牧師であつた、聖職者であつた。たぶん、この映画に出てくる母親、威圧的で、自分の意思のみを押しつける、まさに「死さえ逃げていく存在」のような祖父と、それに反発し、女性関係の賑やかな家庭的でない父親、を見て育つた息子はまた、どういう屈折した生き方をしなければならなかつたのだろう。そのことを想像することで、一本の映画ができる。

まあ、父親と息子の対立はどこにもあるもので、ばくの父親はばくが中学2年のときに亡くなつたし、それまで長く入院していたので、父親との確執というスリリングなドラマはなかつたが、男児は父親を殺し母親と交わるといふ欲望を持つことで自我を確立していく、といったのはプロイトである。それに対

サクもまたその愚を息子に及ぼしている、という親子のあり方、それはベルイマン自身の、位の高い牧師（権威あるものはすべて高低があるのだろう）だった父親の厳しかった教育への反発、父性にたいする反抗そんなものが根底にあるだろうし、まあいってみれば、ベルイマンの映画はすべて、父親への恨みつらみだけなのだが、そんなに恨みつらみがあるなら、ベルイマンは直接父親にその思いの丈を吐きだしたことがあるのだろうか。ないだろうとおもふ。ないから映画という媒体を借りて父親への泣き言を吐きだしているにすぎない。しかしそれがただの、個人の泣き言、恨みつらみで終わらないところがかれらしいが、いやいやそうではなく、かれのマジックでばくら観客はかれの恨みつらみを自分の側、観客の側に置き換えさせられているのだろう。だから、かれの映像を見ながら自分の幻想を組み立てることに成功しているのだろう。

『フアーニーとアレクサンデル』に登場する悪魔のような牧師を父としたベルイマンは『秋のソナタ』でイングリッド・ババグマンとリヴ・ウルマンの母親に愛憎入り乱れた言葉のバトルを演じさせているが、19歳で家を出てそれ以来父親とは会わなかつたというベルイマンだが、家にいたころ、このように父親とバトルをやつたことなどなかつただろうな、とおもふ。

ベルイマンはたしか五度ぐらい結婚と離婚を繰り返したし、リヴ・ウルマンなど何人も有名女優の愛人を抱えていたベルイマンは「健全な家族」を持たないことで、父親の「聖職者面」に対抗したのかもしれないが、結婚と離婚を繰り返し、なおかつ女優というやっかいな存在を愛人にするというタフさはすごい。

抗して、ドウルズガタリは、プロイトはひとの無意識を一元化して解釈しようとしている、それは資本主義がつくつたもので前資本主義時代にはないものなのだと批判し、プロイトはリビドー（欲望）を家族という名の代理（オイデイプスという象徴）のなかに閉じこめなければ気がすまないようだ、と皮肉っている。エディプス・コンプレックスはひとが本来的に持っているものなのか、社会がうみだしたものなのか、なかなかひとのこころは処しがたいものである。

もつともベルイマンはイーサクを痛めつけるだけ痛めつけるのではなく、最後には救いを用意して、この映画はベルイマンの救いの、たぶん、葛藤しつづけた自分の父親との関係にたいする、ひとつの癒しの形で、和解の形で終わらせたかったのだろうとおもふ。（若い両親をモデルにした『愛の風景』を見てると和解など不可能なようだったが。あの映画では父親と母親でさえ和解できなかったのに）

道中、若いころ愛したサーラに似た娘（ビビ・アンデション）が二役で、彼女はベルイマンの愛人だったがこのころ破局がきていた」とふたりのボーイフレンドを拾うのだが、かれらの若さと未熟さと率直さがイーサクの心を開かせ、最後の最後、かれの人生最大の幸福ごと、名誉博士号授与式の終わった夜、かれらはイタリアへ行く別れを告げにくるのだが、そのとき、サーラに似た娘はイーサクに「ふたりのボーイフレンドよりもあなたが好き」という。こんな幸運に恵まれることは奇跡に近いだろうが（かつての愛人にそんなセリフを言わせるのは悪趣味のような気もするが）、ベルイマンはさらにもうひとつ救い

の手をさしのべている。夢のなかでサーラが出てきて、イーサクの両親が仲良く釣りを楽しんでいる場面に案内してくれるのだ。自分にも穏やかで両親に守られていた幼年期があったことを思い出しているイーサクの姿で映画は終わるのだが、イーサクは「孤独」から解放されたとベルイマンは言いたいのだろうか、サーラに似た娘の一言や、幼年期の追憶で「孤独」は解消されるのだろうか。まあ、このへんはひとそれぞれだろうが、ぼくはイーサクの夢で象徴されるような特異性などない凡々たる生き方をしてきたので、イーサクの気持ちが変わらないだけなのかもしれない。

父親は教育には厳しくて子どもの時分のベルイマンにはきつくあたったらしいが、『処女の泉』でも父親が娘を厳しくしつけていて、娘をむりやり教会までいかせるのだが、その途中暴漢に襲われ、乱暴され殺されてしまう。ベルイマンの、おれもこんなにきつくしつけられたぞ、下手したらこの子みたいに死んでたかもしれないぞ、という恨み声が聞こえてきそうな映画で、父親は娘の死体を前に、神はすべてを見ていたはずなのに、なぜ黙ってこの惨劇を見ていたのか（これがベルイマンの映画を貫いている、神の沈黙（神の不在、ではない）というテーマであるのだが）、と神に仕えるベルイマンの父親への批判の声をあげながら嘆き悲しむのだが、この映画も最後は奇跡的な救いを用意している。死んでいた娘を運ぼうとするとその地面から泉が吹き出してくるのだ。まあ、日本人のぼくから見ればご都合主義と言えど都合主義だが、こんなところがベルイマンの映画を支えているだろう。

そんなふうには父親への恨みつらみがいとも聞こえてくるベルイマンだが、フィンランドのアキ・カウリスマキと並んで好きな監督である。カウリスマキの軽み、喜劇性、飄々さ、人生斜め読み、にくらべベルイマンは剛直球を投げ込む監督で、「神の沈黙」という日本人のぼくにはよくわからないことを延々と撮りつづけていたが、まあ「神の沈黙」というメインテーマはわからないとしても、生きていることの孤独や恐怖、祈りや願い、怒りや許し、そんなものは日本人のぼくにもわかる。スウェーデンで暮らしている小学校から高校まで仲の良かった同級生の話では、ベルイマンは難しくて観客の入りは悪いがスウェーデンでは著名な監督だと言っていた。なにを言っているのか、九十パーセントは理解できないが、残りの十パーセントはなんとなくわかる。そのなんとなくわかる十パーセントもほんとうはよくわからないが、気になる光景やセリフで、見終わつた後、あそこだけが残っている、きつとスウェーデンのひとりたちはベルイマンとはそういう付き合い方をしているとおもう。「大家の詩はなにを言っているかわからんが一行や二行ぐらいは気になる行があつて、心に残る」といってもらえるような詩を書きたい、とベルイマンのDVDを見ながら、そんなことをおもった。